



第29回日本リーグ・プレーオフ男子は、レギュラーシーズン1位の大崎電気が同4位のホンダを、同2位の大同特殊鋼が同3位の湧永製薬を準決勝で下して決勝進出。白熱した両者の争いは、後半のワンチャンスで得たリードを活かした大崎電気が制し、創部46年目にして初の日本リーグ制覇を果たした。

JAPAN LEAGUE PLAY-OFF MEN'S FINAL

大崎電気 28 (10-10) 24 大同特殊鋼
18-14

名門・大崎が悲願達成

2004-05年シーズンの開幕前からライバルチームの誰もが「頭ひとつ抜けている」と評していた大崎電気。

昨年9月の全日本実業団、10月の国体を連覇。その評価はさらに高まった。

大崎セブンが得た自信を揺るがぬものとするはずだった昨年12月の全日本総合、湧永製薬との決勝は、残り2分を切って4点リード。

誰もが同じ結末を思い描いた場面からの戦いぶり、そして個々の表情は、「真の王者」という称号を与えるには、まだまだ時期尚早と言わざるをえないものだった。

屈辱以外の何物でもない大逆転負け。

後に引く重苦しさが残ったが、シーズン前から取り組んできたことが間違っていたわけではない。

「真の王者」となるための産みの苦しみを味わったに過ぎないのだ。

そして、その苦しみは自らで乗り越えるしかないことを、大崎セブンは胸に刻んでいた。

チュニジアでの世界選手権を経て、日本リーグ・レギュラーシーズン終盤戦が再開。

ブレイク期間に入る前の段階で10勝1分2敗、唯一、プレーオフ出場を確定させていた大崎は、残る5試合も4勝1敗で駆け抜け、14勝1分3敗とライバルたちを大きく引き離し、レギュラーシーズン1位の堂々たる成績でプレーオフへと向かうことに。

ただ、終盤戦で喫した1敗は、全日本総合決勝で敗れた湧永相手でのもの。

プレーオフ出場権獲得のボーダーラインにいた湧永セブンが目の色を変えて向かってきたとはいえ、リベンジに燃えていた大崎セブンの心と身体は空回りぶりがありあり。

湧永に対する“トラウマ”はぬぐい去られていない印象を受けた。

さらには、プレーオフに向けての調整期間に、ライバルたちが警戒するクセ者・豊田が左足を肉離れ。

これまでの戦いとは比べものにならないプレッシャーのかかる大一番で、心技ともに崩れかねない不安を抱えることとなった。

プレーオフ進出は3年ぶり2回目。そして、屈指の伝統を誇る老舗ながら、日本リーグでは優勝経験のない大崎。

本来ならばまぎれもないチャレンジャーのハズだが、世界選手権代表5人を数え、自他ともに認める屈指の地力を持ち、昨年末のニガイ経験もあるだけに、ここで負けては存在意義さえ問われる立場。

「負けられない」「負けるわけにはいかない」の思いに満ちての決戦だった。

まずはホンダに引導を渡す

プレーオフ準決勝の相手は、リーグ7連覇をめざすホンダ。

今シーズンこれまで大崎に対し1分3敗と白星のないホンダセブンに、より失うものがないチャレンジャースピリットが感じられた

スタートだった。

重苦しさに包まれた大崎セブン。

そのムードを振り払ったのが、悲願のビッグタイトル獲得に燃える大ベテラン・岩本。

本番間近のトレーニングで生まれ変わったかのように充実感を増していた左腕エースは、積極的にホンダDFの壁を打ち抜いた。

王者の意地で粘るホンダに最後まで苦しめられたものの、後半20分、1点差に追いつけられた場面を持ちこたえるなど、昨年末の経験も十分に活かした戦いを見せた大崎セブン。

29-27でホンダの7連覇の夢を打ち砕き、初のプレーオフ決勝に名乗りをあげた。

大崎セブンが激突を望んだ湧永製薬は準決勝で敗れ、決勝の相手は大同特殊鋼に。

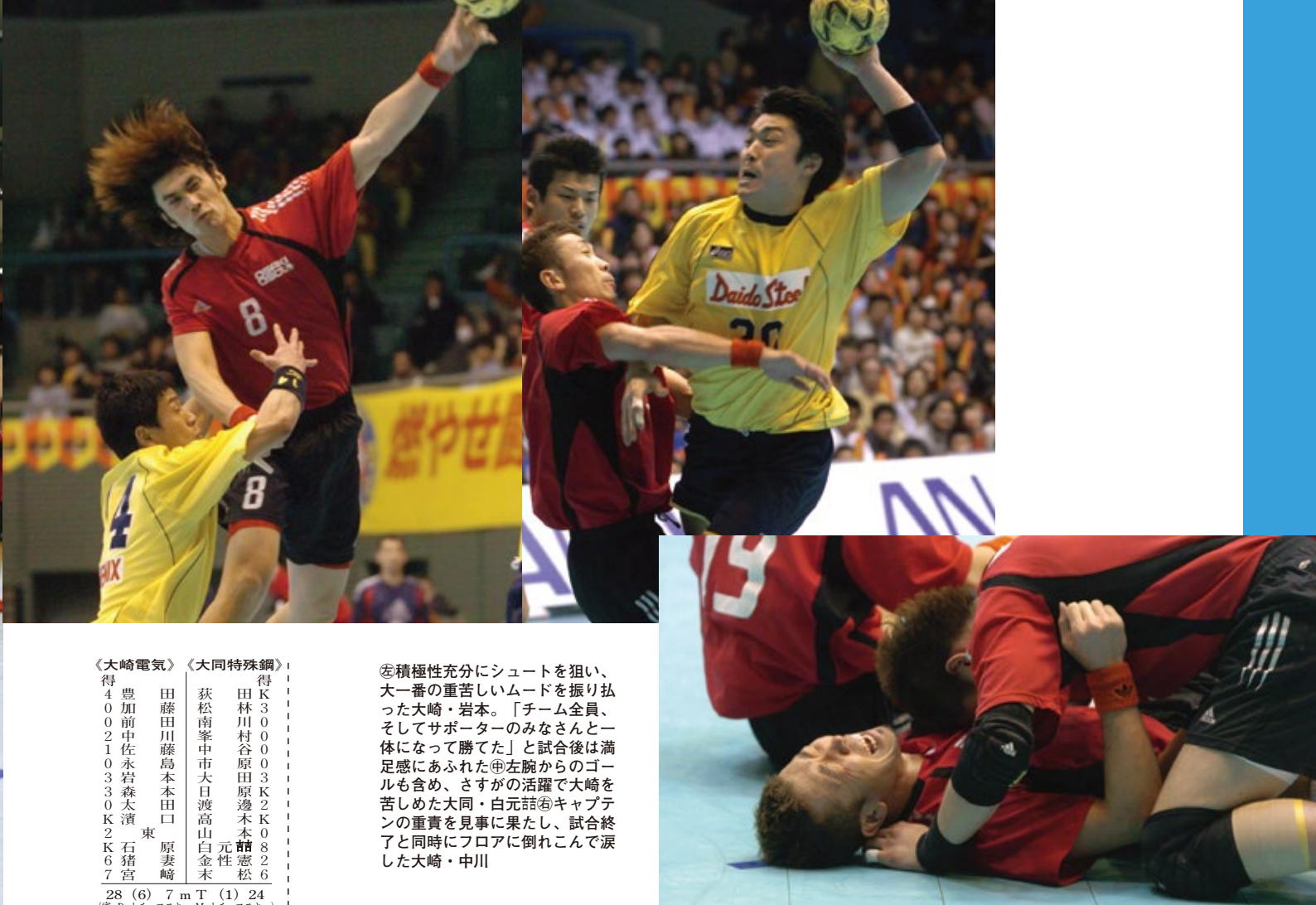
それでも、大崎セブンの士気に何ら影響はなかった。

ホンダ戦で欠場した豊田が痛み止めの注射をしてスターティングメンバーに名を連ねてのスタート。もう後ろを振り返らず、ゴールをめざして突き進むしかなかった。

大崎・濱口、石原、大同・高木と双方の守護神の活躍に加え、「負けられない」の思いがミックスされ、流れに大きな傾きのなかった前半は10-10のタイスコア。

その流れは後半に入っても続いた。

試合が動くキッカケは、8分24秒、大同の不正交替。すでに6分54秒、松林が退場してCP5人になっていた大同は、新たに末松が退場となってCP4人。



《大崎電気》	《大同特殊鋼》
得点	得点
4 豊田	4 田村
0 加前	0 林川
0 前中	0 南村
2 佐佐	0 谷村
1 永岩	0 原田
0 森太	3 渡邊
3 濱	2 高木
0 K 濱	0 山本
2 K 石	0 元性
6 猪	2 松
7 宮	6 松

28 (6) 7 m T (1) 24
(審・D・ナチュフスキー・M・ナチュフスキー)

⑤積極性充分にシュートを狙い、大一番の重苦しいムードを振り払った大崎・岩本。「チーム全員、そしてサポーターのみなさんと一体になって勝てた」と試合後は満足感にあふれた④左腕からのゴールも含め、さすがの活躍で大崎を苦しめた大同・白元詰⑥キャプテンの重責を見事に果たし、試合終了と同時にフロアに倒れこんで涙した大崎・中川

全日本総合決勝で、1点の重み、とるべき場面で得点することの大切さをイヤというほど思い知らされた大崎セブンが、このチャンスを見逃すはずはなかった。

数的に2人多い状況で、まず宮崎がロングを決めて、14-13と1点リード。

大同・松林が戻ってからも続くパワープレーのチャンスに岩本がカットインから打ち込み、さらに猪妻が7 m Tを決めて、10分、16-13と大崎が3点リード。ワンチャンスを活かした大崎セブンの集中力が光った。

よぎった悪夢も力強く封印

さらに、たたみかけて優位を不動のものとしたところで、勝利の女神が大崎セブンに最後の試練を与える。

12分には岩本が、15分には豊田が、大同が誇る7 mハンター・荻田に7 m Tを阻まれた。全日本総合決勝の悪夢が頭をよぎる。

それでも、大崎セブンは決して弱気にならなかった。

白元詰を軸とする大同に詰め寄られては、しぶとく盛り返す。

若きエース宮崎が、たたき上げのポストマン東が、全日本総合決勝では大事な7 m Tを決められず、不覚の涙を流したベテラン森本が、大同が引き寄せようとする流れを断ち切るゴールをたたき込んで、優位をキープした。

大同もよく粘り、残り2分にさしかかった

段階では26-24と大崎のリードは2点。

全日本総合決勝の同じ場面での4点リードを思えば、スリルに満ちてもおかしくなかったが、2度、同じ轍（てつ）を踏むような大崎セブンではなかった。

「想定範囲内」とでも言いたげに落ち着き払い、むしろ楽しむかのように時間の経過を待った勇士たち。結果的にリードを4点に広げ、そのときを迎えた。

満面の笑みをたたえる者、昨年末には流れなかった涙が自然と湧き出てきた者。

苦難を乗り越え、自らつかみとった日本リーグ初優勝の味を、思う存分に分かち合った。「創部46年目にして、唯一残っていた日本リーグのタイトルを獲得できた。

会社やファンのみなさんなど多くの支えがあり、それが頭に浮かんでグッときましたね。

やってきたことをある程度出せ、コートだけでなく、ベンチ、そして、ベンチに入らなかった選手も1つになって戦えたことが勝因」と、初優勝の喜びを語る大崎・首藤監督。

タイムアップと同時にフロアに倒れこみ、涙でいっぱいになったキャプテン中川は「長いシーズン、大崎だけでなく、全日本でもキャプテンとして、チームのために考える時間が多かった。そうしたいろいろなことが、涙となって思い出されてきました。

とにかく勝てて良かった。これで熟睡できます」と、真っ赤な目で熱い思いを語った。直前練習で肉離れした豊田、準決勝で左足

首を痛めた猪妻と、本来ならば欠場していてもおかしくない状態の選手もコートに立っての戦い。全日本総合決勝の悪夢がよぎる場面も少なからずあった。

それでも、チーム全員が強気に、誰も落ち込むことなく前を見続けた大崎セブン。

まさしく、昨年末のとてつもなくニガイ1敗を、貴重な糧（かて）として、ポジティブにとらえてきた成果だった。

個々の顔ぶれからすれば、「もっと“世界”を感じさせてくれる斬新な戦いを見せてほしかった」という声も聞かれたが、「今度は負けるわけにはいかない」、「まずは結果を出してから」の思いが強かった大崎セブン。

試合の中身は、来シーズンへの課題というところだろう。

首藤監督も、そのあたりは心している。

「これからやるのがいっぱいある。

満足したら終わりですから、先を見てやっていきたい。会社のバックアップもあるので、球界へのメッセージを発信し続けたい」

むしろ、これからが大切というコメントで締めくくった。

それはセブンも同じ思い。まだまだ可能性を秘めているし、決勝のコートに立たなかった面々にも、わずかなキッカケでブレイクできる逸材が目白押し。

1つ、大きな肩の荷を降ろしたこれからの戦いこそが、大崎電気の本領発揮となりそうな気がしてならない。

MVP



DAISUKE MIYAZAKI
宮崎大輔

祝

悲願のリーグ初制覇 大崎電気

昨年の全日本総合決勝の勝負所では、ごくごく普通の若手選手の1人になってしまい、飛躍を期して出場したチュニジアでの世界選手権でも、世界の壁に跳ね返された宮崎大輔。

そういう意味でも、今回は再起にける意欲、そして違いを見せつけるための、絶好の舞台だった。

準決勝は12得点、決勝は7得点。

持ち前のジャンプ力を活かした強打はもちろん、冷静にポスト、サイドにアシストパスを送って、相手DFを翻弄（ほんろう）。MVPに輝いた。

「大崎として初優勝。すごうれしかったです。」

この1年は長かったですが、首藤監督、中川キャプテンに引っ張ってもらうとともに、ファンみなさんの応援、サポートで乗り切ることができました。

今回もファンのみなさんの声援が耳に届き、

自分の力になりました」

饒舌に初優勝を振り返る宮崎。

「大崎はみんなの力が強いので、ボクが活きて見えるんですよ」と、初のプレーオフでいきなりのMVPも、おごることなく受け止めた。

もちろん、日本一、MVPで満足しているわけではない。

「世界一が目標ですから、日本リーグの優勝は、これが当たり前ぐらいに思わなければ。」

世界で学んだことを、みなさんに伝えていくのも、ボクの役目とってますから」

今回の優勝をチームメイトと心の底から喜んだが、それもあくまで通過点ということだろう。

楽しみあふれる来シーズン。その言葉どおり、日本リーグに安住することなく、一歩も二歩も先に進み、球界に刺激を与え続けてほしい。

ニガい敗戦を糧に再起

勝負に「たら」「れば」は禁物だが、もし、昨年末の全日本総合で、大崎電気がまさかの大逆転負けを喫していなければ、その後の流れはどうなったろうか？

全日本実業団、国体、そして全日本総合と、大舞台の決勝で3連勝していれば、いっそう自信は確固たるものとなり、このプレーオフも、接戦ではなく、一方的な展開で、4冠を達成していたかもしれない。

逆に、達成感が慢心につながってペースを乱すとともに、リーグタイトルをまだつかんでいないにもかかわらず、さながら王者としてプレーオフを迎えることとなり、ライバルたちは捨て身でぶつかってくる。

プレッシャーの中、終盤にもつれこむクロスゲームとなったときに、果たして今回の決勝のような落ち着いた試合運びができたかどうか。

また、今回、対戦はなかったが、全日本総合で苦杯をなめた湧永製薬と、もし、決勝で対戦となれば、大崎セブンは昨年末のリベンジに燃えたことだし、対策も充分に練っていたろうが、湧永サイドは対大崎電気にかんがりの自信を持っていたことも事実。予断を許さないゲームとなっていたことは確実だろう。

結果的には、首藤監督が相手にとられることなくセブンの心を1つにまとめ、「『あ』のとき負けてよかった』と言おう」を合言葉に、セブンはひたむきにトレーニングを積んできた成果を、大一番で見事に発揮。

敗北、ニガい経験を、しっかり反省しつつ、後に引きずらないでポジティブに切り替えることの大切さを教えてくれた戦いでもあった。

生え抜き組も意地みせる

チーム一丸となって成し遂げた日本リーグ初優勝。

その喜び、感動を分かち合ったセブンだが、とりわけ大崎電気の生え抜き選手にとって、感慨深いものがある。

堅守で勝利の原動力となった濱口は、加入8年目。

彼が加入前の大崎は、優勝こそないものの、ベスト4圏内を維持。「がんばれば、プレーオフ、そして頂点に手が届く」と勇んでの加入だったが、入ってみれば6位、7位とお尻に火がつく「裏プレーオフの常連」（濱口）。

自身も定位置をつかみきれず、会社を辞め、故郷で第2の人生を考えたこともある。

しかし、2000年から首藤監督体制となり、ソウルオリンピック代表GKの矢内浩さんもコーチに就任。

「あと1年やってみよう」という気持ちにつながり、2001年シーズンからは、岩本、中川らも加入。

「もしかしたら」の思いが加わり、「あと1年」が延びていった。

「あいつしかいない」と認めるキャプテン中川をはじめ、中心となる移籍選手や若きエース宮崎らの力、存在を受け止めつつ、「生え抜きとして活躍したい」という思いも忘れなかった。

お互いの力が1つになっての日本一。

「スター軍団と言われますが、苦しいときこそ声をかけ合え、初心に戻れたことがいちばんの勝因ではないでしょうか」

いい意味での生え抜きの意地を随所に感じさせた濱口は、胸を張って感激の瞬間をかみ締めていた。

最優秀監督賞を受賞した首藤監督

生え抜きの意地を見せた濱口

